

徳川家康

6

読心火の巻
龍雲の巻

山岡荘

徳川家康

卷の雲碧・卷の火心続

夢庄

山岡莊八 講談社



徳川家康 第六卷 続心火の巻

碧雲の巻 昭和三十九年十二月三

十日第六刷発行 著者 山岡荘八

発行者 野間省一 印刷所 凸版

印刷株式会社 製本所 和田製本

工業株式会社 発行所 株式会社

講談社 東京都文京区音羽町三ノ

一九 振替 東京 三九三〇 電話

東京(九四二)一一一一(大代表)

© 山岡荘八 一九六三

定価 六百二十円

徳川家康

6

続心火の巻
碧雲の巻

目次

続心火の巻

民の声

七

すべてを賭ける

一八

異相勘定

三三

堺の入札

四八

桔梗の雨

六〇

大虹

八二

戻り梅雨

一〇三

葵の陣立

一二二

碧雲の巻

烈日

一三三

東への道

一五五

虚実の雲

一七五

紅葉しぐれ

一八八

礎

二〇四

季節の理

二二〇

放れ箭

二三五

放鷹談義

二五四

吹雪の城

二六九

江北出兵

二八四

賤ヶ嶽

二九六

玄蕃崩れ

三一四

意地の塔

三二五

有情無情

三五〇

付録（参考地図及び諸家系譜）

装幀 稲垣行一郎

挿画 木下二介

箱裂地 麻地草花人家文様茶屋染

提供 山口勉

表紙金版 徳川家康直筆署名

徳川家康

6

碧雲の巻
続心火の巻

続心火の巻

民の声

一

家康が信楽に着いたのは、すでにとっぷりと日が暮れてからであった。

一つの危機を切りぬけると、道は次第にひらけるもので、ここにはすでに先行していた京の呉服師、亀屋栄任と茶屋四郎次郎の手が及んでいて、一行は半刻の睡をむさぼり、草鞋をかえて丸柱への嶮岨な峠に立向うことが出来た。亀屋も茶屋も、伊賀衆、甲賀衆の護衛を見て、ここで安心して一行に別れた。

もはや、道案内には武力がある。あとはただ不眠不休の肉体的な苦痛とたたかう事だけであった。

いや、時には無法な山賊、野盗のたぐいが、顔を出したが、これは居丈高になって、一行をはばむほどの力はなかった。

しかし家康が、その人生で最も多くを学んだのは、実は、丸柱から河合、柘植、鹿伏菟とぬけ、鈴鹿川の川原に沿って伊勢の海の白子浜へぬけるまでの一昼夜の旅であった。

その間も、例の百姓孫四郎は、いぜんとして一行について来る。

彼はどうかやら家康に離れたい愛情をおぼえ出している。とみえ、時々家康の視線が彼をとらえると、ニコリと笑ってうつつむいた。

ずっと昔、まだ家康が駿府にあって、今川義元の人質であった頃、その精神を継承させようとして訓育につとめて呉れた執権の雪斎禪師のことを思いうかべた。その禪師が孟子の講義の中で、

「——この民聴の語を深く深く味わいなされ」

幾度も言葉をかさねていったことが思い出された。

民聴とは民の声に真理を聞けという意味であった。民の声以外に真理があると思うと、それはいつか勝手な妄想に

なっているという訓えであった。

その声を聴くためには、まず「自我」を捨てて「無」になることであり、「無」になりきることが、実はより大きな「我」の確立の基礎なのだと言われた。

そして家康は家康なりに、その「無」を身につけていたつもりであったが、返り血の百姓、孫四郎の出現は、そうした家康を、

「——まだまだ」と、あざ笑ってやまなかった。

(これは雪斎禪師の遣わされた者かも知れぬ……)

家康は歩きながら時々眼で孫四郎を探すのは、そうしたきびしい反省の去来を語るものであった。

(民の声に従うほかに真理はない……)

その意味を味わい直すと、信長の死までが、決して不慮の死ではなく、自然死であったような気がしてくる。

信長は、はじめ民の声を、最もよく聞いて蹴起した選ばれた傑物であった。

彼は、戦乱に飽いて平和を渴望する民の声を代表して、あらゆる敵にぶつかった。

いやしくもそれが国内治安のさまたげになる存在と見てとると、叡山の僧徒であろうと本能寺の信徒であろうと容赦しなかった。

そして、近畿へようやく秩序の光が射しそめた時に倒れ

た。

(この頃では、すでに信長は民の声を離れて動いていたからではなからうか?)

民の声は、このあたりで彼に休養を求めていたのに、彼は、外交交渉の余地ある中国征伐へ、遮二無二すすんでいったのではなかったらうか……?

一行が伊勢の白子浜につくまで、家康は、ずっとその事で自問自答をつづけていた。

二

仮りに……と、家康は考えるのである。

(信長がここで、中国と柔軟な外交交渉をつづけながら、彼の勢力下にある広大な東日本の民力休養につとめていたらどうなっていたであらうか……?)

その場合、恐らく光秀に乗ずる隙は見出せなかったのはあるまいか。遮二無二中国を武力で押しつぶそうとして、民の声に耳をふさいだ無理が、

(われ一度び蹴起せば……)

と、光秀をして思い誤らせる原因になってはいなかったであらうか。

人一倍細心な計算高い光秀であった。

もし光秀が、信長の非を鳴らして起っても、民心は信長

と共にあり、彼に味方する者は殆んどない……そう思える情勢だったら彼は、こんどの挙に出ずる勇氣は持ち得なかったのではなからうか……？

「――民の声……民の声……」

その真実の声を計らずもこんどの旅の途中で、一百姓の口から家康は聞き得た気がするのである。

正直に云って家康は、それまで三河に帰りつくことに一心で、帰りついてからどうするかについては、まだ深く考へてはいなかった。

信長との信義の上から当然のこととして大軍を催し、一挙に光秀と雌雄を決さなければならぬ……とは考へていても、その戦術戦略は、その場にのぞんで臨機の処置をとる氣であつた。ところが、

(果してそれでいいのだろうか?)

河田から鈴鹿を経て白子浜に辿りつき、未明の浜に立つて海を渡る船の便を求めさせる頃から、しきりにそれが氣になり出した。

いまここで大軍を催し、一気に光秀と雌雄を決そうとする事は、信長が遮二無二中国を屈服させようとしたのと、同じあせり、同じ過ちを犯すものではなからうかと、しきりにそれが反省を迫つて来るのである。

この白子浜から知多半島の常滑へ最短距離で出てゆく船

は、柴を積んで行く小舟よりほかにないのだが、それすら今は一艘も浜にない。

このあたりはもともと織田信孝の勢力範囲で、信孝が四国へわたるため、軍兵をひきいて岸和田へ赴いているので、領内の大船は殆んど堺の近くへ徴発されて行っている。

家康は、この浜へ来合せて碇を入れている松阪の商人で大湊からやつて来ているという角屋七郎次郎を船から浜へ呼びあげて船のあつせんを依頼した。

「これは困りました」

と、角屋は汐焼けしたひろい額に手をおいて、

「私めは船をご用意するのはいいとせぬが、水先案内がござりませぬ。ご存知でもござりましょうが、京に大事が起つたとかで、あとどれだけ船が入るか分らぬ。柴舟一艘も無断で他領へ漕出すなど、この辺りの村から村、浜から浜へずらりとご高札が立つたところでござりまする」

「なに、すでに高札まで立つたのか……」

「はい。私の船のことは、どのようにも致しませんが、このあたりの百姓漁師が……」

「そうか。よし、わしみずから頼んでみよう」

夜通し歩いて来て、すでにあたりは白みかけていた。なるほど浜に浮いている船といえば、志摩から廻航して来た角屋の船一艘。潮の変りのはげしい海で水先案内がなければ

ば渡るのは無理と、家康主従にもよく分る。家康はみずから民の声をただす心で、つかつかと、一軒の百姓家の前に立った。

三

「この家のあるじを起すのでござりまするか」

あわてて本多忠勝が戸をたたこうとするのを、

「わしが起す。その方たちは、ずっと離れて控えていよ」

家康は軽く手を振って、暁の闇の中にひっそりと静まり返っている茅葺家の板戸を叩いた。

百姓家ではあったが、みぎわ近くに点在する苦小屋じみた漁師の家とは比べものにならない。土地ではやはり中農以上の裕福さなのであろう。

「これ、ちと聞きたいことがある。起きてくれぬか」

家康が声をかける前に、中ではすでに眼ざめていたらしい。シースーとうるたえ騒ぐ家族をおさえる声をして、

「はい。どなたで、何用得」

震えをおさえたさび声が戸に近づいてくる。

「ご覧の通りのあばら家で、銭金ぜにはござりませぬし、生憎娘は四日市の親類のもとへ泊りにいっている。が、麦ならばちとはござるで……」

「盗賊ではない。案じるな」

家康は、チクリと心に悲しい針を感じながら、

「こなたは村の事情にも明るかろう。対岸の常滑の浜まで柴舟一艘くめんして欲しいのじゃ」

「なに柴舟を出してくれと……それはとんだ難題だ！」

云いながら、戸をあけて首を出して、

「舟はな、どんな小舟も他領へ出すなど、昨日の夕方、強いお達しがあつたばかりじゃ。それに叛いてはこっちの首がない。何でも、織田の御大將さまが都で討たれて、又日本中が大乱になるということで……おや、こなた様はお待じゃな」

家康は、わざといかつくうなずいた。

「達しのあつた事は知ってこなたに頼むといったら何とする」

「えっ!? ではこのわしを、小川孫三と知って起された……そういうこなた様は、いったいどの、どなたなのじゃ」

「孫三……」と、家康は、相手の名乗った名をそのまま呼び返した。

「天下を再び騒乱の世にせぬため、三河、遠江、駿河三カ国の主、徳川家康が、夜の明けぬ間に、この海を渡って本国へ戻りたいと申している」

「えっ!? ではこなた様は、徳川さまの、ご家来か……」

何を思ったのか孫三とみずから名乗った四十近い百姓

は、いきなりびたりとその場へ坐った。

「そうか。あきらめた……さ、勝手にこの首をお斬りなされ」

「首を斬れと……」

「仕方がない。舟を出さぬと云うたら斬る気であろう。わしが斬られるのを恐れて舟を出したら、こんどはご領主の手で、わしばかりか、家族親類みな斬られる。これが……乱世の百姓の……悲しいさだめと諦めている。さ、お斬りなされ」

家康はぐさっと胸へ短刀を突込まれたような気がした。

とにかく表向きは、国と民との守護をする筈の武将であつた。それがその実は、武器をもった厄介者と見られている……

夜が明けて、伊勢の海いっぱいがバラ色に染っていった頃には、家康の乗った角屋の船は、海上をまっすぐ常滑に向けて走っていたが、家康はその船上で、まだ眼を瞑ったまま考えこんでいた。

むろん、その角屋船の案内には、白子浜の柴舟がせっせと先に立ってはいたが……

四

家康は、帆柱を背にして、木像のように坐っている。

いま自分を前後から圧迫しているものは、船のすみにちよこなんと坐っている、近江大石郷の、例の返り血の百姓と、角屋船の案内に立っている柴舟の中の小川孫三とであることを、不思議だと思ったり、不思議ではないと思ったりした。

白子浜の百姓孫三は、いやといえば理非にかかわらず斬るものが侍だと思ひこんでいた。

武將にとって、これほど大きな不信がまたとあろうか。彼等は武力に頼ってそれに護られた経験はない代りに、却って塵あくたのように蹂躪されて来ていたのだ……

その事実が、ひとりで「天の声」となつて孫三の口から家康へ返つて来た……

孫三が舟を出しては一族みんなが領主に殺される、それゆえ自分を斬つて呉れと言ったとき、家康は、羞しさに全身がすくみそうな気がした。

「——聞いたか家康。これがまことの民の声じゃ」

虚空で叱咤している雪斎禪師の鞭が唸りを生じてふりおろされて来たのである。

「——そうか。そなたはそれほど武士を無法なものと思っていたのか。よし、では他へ頼んでみよう。おどろかせて済まなんだ」

と、家康は云った。

この一言は孫三にとっては予期しなかったことだったので、

「——他へ頼んだとて無駄なことじゃが……いったいお前さまは、徳川方の何とおっしゃるお侍じゃ」

「——家康自身じゃ」

「——えっ、何とおっしゃった？」

「——わしが、徳川家康じゃといったのだ。家康はよい事をこなたに聞いた。ただいま、都での急変をきき、大急ぎで旅先から本国へ戻る途中だが、本国へ戻ったら、こなたの今の言葉を味わい直そう。自分一身のためだけに決して兵は動かさぬようにのう」

孫三の耳にはあとの言葉は入ったのかどうか？　ただ、舟は出せぬと断った自分を、斬りもせず立去ろうとするのが、駿、遠、三の太守家康自身であったと知って、ともに声も出ないようであった。

「——お……お……お待ちなされて」

彼は、ころがるように軒先へ出て来てひれ伏すと、

「——出しましょう。舟を出しましょう！」

と、叫ぶように言いだした。

家康にはその一変した態度の裏にある、哀しい人間の孤独さが又たまらなかった。

無視され、ふみにじられて来た者が、はじめて認められ

た歎び……その歎びが、孫三を子供のように素直な感激にかり立てている。

「——舟は出します！　はい、われ等一族、たとえどのような事になろうと、お館さま、直々のお言葉とあれば……はい、出します！　出さずには居られませぬ」

家康はその孫三に、あとの風の少いよう、あれこれと智恵を貸してやって案内に立たせて来たのだが……

孫三は、正体不明の闖入者に舟ごと拉致されたことにし、娘や妻女は長太の浦の知人の家にあずけさせて。

これで家康が伊勢をも治める日がなければ、孫三親子はその生涯で再び相会う日はあるまい……

五

家康の胸中では、素朴な人なつこきで彼の危急を救ってくれた二人の百姓と、光秀の叛乱による現実の世相とが哀しくからみあつては離れていった。

百姓たちが家康を助けたのは、意識していると否にかかわらず、家康によって平和を保証されたいと希う心の現われと受取れる。

それなのに、その家康は、急遽三河に引きあげて光秀征伐の戦に没頭しなければ、信長への義理が立たない立場にある。

「――信長への義理……」とは果して何であろうか？

それは乱世に新しい秩序を打立て、百数十年間続いて来た戦いに終止符を打つことで、その意味では信長の意志と百姓たちの希いとは同じものであった。

（それなのに、わしは……）

と、考えて来て、家康が、思わずボンと膝を叩いたのは、すでに陽は高くあがって、行手に、なつかしい知多半島の浜辺の濃藍が重なりあって見えだしてからであった。気がつくとも風も彼等のために吹いている。

（よしッ、これでわしの心は決りそうだ……）

家康は小さな義理に拘泥することなく、どこまでも一筋に信長の意志の、真の継承者であるべきだったと悟ったのだ。

そう悟ると、前に行く柴舟の上の孫三の姿がそのまま神仏の示現に見え、思わず合掌せずにいられたかった。

「見よ。殿が合掌してござるゾ」

と、酒井忠次が石川伯耆に小声でささやいた。

「よほど嬉しかったのじゃな。三方ヶ原の戦の時も合掌などではせなんだからの」

家康の肚の底までは見抜けず、彼等の微笑はそのまま船上へひろがった。

したがって、船が常滑の沖にいきりを入れ、孫三の柴舟

で次々に浜辺へ運びあげられた時の家康の言葉も、家臣たちにはただ事なく着けたことの喜びと解された。

「孫三、大儀であった」

家康は浜へおり立つと、すぐに孫三を呼んでいった。

「このあたりはな、又戦場になるかも知れぬ。それゆえ、こなたは駿河へ送ってやろう。駿河までは決して戦場にはせぬからの。そこでこなたに懸命の地を選んで与えるゆえ、落着いたら家族を呼んで暮すがよいぞ」

「は……はい」

孫三はその時も、いじらしいほど素直に答え、すぐに浜近くの寺の中へ駆けこんでいった。

その寺は海に面して裏門を持っていた。名は正住院と云い、孫三にとっては、年々柴を買いあげてくれる得意先でもあった。

やがて寺の裏門が内から開かれ、一行はひとまず烈日を避けて寺門のうちに吸いこまれた。

「ここまで来れば、もはや大丈夫じゃ」

「といてうかと心の紐はとけぬぞ。このあたりも、野伏り海賊の出没はげしい所じゃ」

「よし、何はともあれ、当山の住持に会おう」

本多忠勝が周囲の見張りを若者たちに命じているのを背にききながら、家康は孫三に案内されて庭先から客殿へと

おりながら、信長と百姓の意志が同じものであったという発見を、酔ったように心の中で繰返していた。

（そうだ。同じものが、それぞれの我執から時々忘れられていったのにすぎない……）

六

草鞋をぬいだのは家康だけで、他の者はみな軒先の日かげを選つて庭に坐つた。

住持の顕空が、家康と知つて、あたふたと衣服を改め、客殿へやって来て平伏した。

「存じませぬこととて、お出迎えも申上げず……当正住院住職、顕空にござりまする。この度は道中つつがなく……」

きちんと両手をついて云いかけるのを、家康は軽く手を振つてさえぎつた。

「ご造作をかけて相済まぬ。実は都で、織田の右府さま、明智光秀が謀叛に倒れられての、われ等夜に日をついで旅先から馳せ戻つた」

「その噂……ただいま、白子の浜の衆から伺い、榮枯ただならぬ世の姿と驚き入っているとござりまする」

「お住持、われ等はこれから急遽岡崎まではせ戻つて、直ちに明智討伐の軍を起そうと思うが、仏に仕えるこなた達ならば、かような場合に何とするかの」

すでに五十を超えたと思われる顕空は、小僧の運んで来た茶を、しずかに家康の前へ据え、ゆっくりと首を傾げて考へていった。

（何のために、このようなことを問いかけられるのか）

半ばは警戒し、半ばはホツとした様子でもあった。

「恐れながら、われ等仏徒の考へは、武將であらせられるお館さまのご参考には……」

「ならぬでもよい。一度秩序の立ちかけた世で、その柱とも云うべき人を倒された……その時まずせねばならぬ事は、仏徒として何であらうか」

「されば……」と、顕空はもう一度慎重に首をかしげてから、

「仏徒ならば、百年、千年の後に知己を求め、ただ一筋に法に従うまでにござりまする」

「その場合の法とは」

「地上へ極楽浄土顕現の大理想を果し終る日まで、守りぬかねばならぬ道かと……」

「地上へ顕現せねばならぬ浄土……とは人それぞれが安居出来る平和を指すのであらうなあ」

「まこと！ 仰せの通りにござりまする」

「いま一つおたずねしたい。その日のために守られねばならぬ道とは」